

ブルターニュの惨状・悪疫と〈エルヴェシウス薬箱〉

——評伝 エルヴェシウス家の人々〔その五〕——

永治日出雄

第一節 〈海の国〉ブルターニュの苦難と惨状

(一)

医家エルヴェシウスが開発したイペカ吐剤は、赤痢への効果的な療法として十八世紀ヨーロッパで広く用いられた。この特効薬は医療行政の一環としてパリ市中の病院や前線の陸海軍に常備され、また〈エルヴェシウス薬箱〉の名のもとにフランス各地へ配送された。そうした地方のなかでとくに貧窮と災害に苦しみ、強力な援助を渴望したのは、ヨーロッパ大陸の西北端ブルターニュである。⁽¹⁾

〈海の国〉ブルターニュに古くは謎の民族が巨石文明を築き、大ブリテン島を追われたケルト人が五世紀に移住した。やがて彼らはノルマン人の侵略や大帝シャルルマーニュの制圧を阻んで、自由と独立を死守し、独自の文化を誇りとした。しかし、一五三二年フランソワ一世はブルターニュ公国を正式に併合し、以後歴代のフランス王権はこの

半島を従属、収奪、差別の鉄鎖で縛りつけた。たとえば、中央集権と重商主義を確立したりシユリユーは、海外発展と新大陸貿易の基地としてブルターニユに着目する。この専制的な宰相はプレスト等に大規模な築港と造船を指令し、莫大な木材を調達するためアレー山岳の大半を伐採・荒廃させた。また、〈偉大なる世紀〉の財務総監コルベールも、〈海の國〉を搾取に恰好の領土とみなし、同地の資源と労働を可能なかぎり収奪し続けた。⁽²⁾

一六七一年五月マリ・ド・セヴィニエ侯爵夫人は二台の馬車に伴われてバリ・トリニ街を出立し、九日後レンヌ近くの領地レ・ロッシユに着いた。十二世紀以来レンヌはブルターニユ公国の首都であり、近郊の都市ヴィトレに総督府と地方三部会が置かれていた。王権の強化を進めるコルベールは、一六六九年名門貴族シャルル・ド・ショーマ公爵を〈海の國〉の総督に任命する。レ・ロッシユはヴィトレから至近の距離にあり、この時期における滞在を機縁にマリ・ド・セヴィニエと総督の妻エリザベス・ド・ショーマの間に、水魚の交わりが結ばれた。⁽³⁾以後『セヴィニエ夫人書翰集』にはショーマ夫人との親交やブルターニユ総督の動静がしばしば叙述される。

〔セヴィニエ夫人の一六七一年七月二日付グリニャン夫人宛書翰〕

思ったよりも気軽に、ショーマ夫人と月曜日にお会いできました。叔父（クーランジュ）が恋している美女ミュリネも一緒でした。ショーマ殿はブルターニユ各地への巡回や十日間招集される地方三部会で多忙であり、殿を待つヴィトレにはおふたりしかいません。私もまた同じように孤独だ、とお察しく下さい。ショーマ夫人はなすすべも知らず、こちらに頼ってきます。愛しい娘よ、ケルゴルヌ嬢を私のがはるかに凌ぐと察しますか。総督の妻とは思えない丁重さで、ショーマ夫人は私に應對されます。正餐のあとふたびおいでになるはずです。私の小道はすべて清浄に手入れされ、庭園も美事です。数日ここに滞在し、自由に散歩されるよう、ショーマ夫人に勧めるつもりです。⁽⁴⁾

〔セヴィニエ夫人の一六七一年八月十二日付グリニャン夫人宛書翰〕

愛しい娘よ、とうとう地方三部会の真中に入り込みました。さもなくば、地方三部会がレ・ロッシュの真中に移転したでしょう。さきの日曜日手紙の封をした直後、騎兵五十人、手曳き馬数頭、騎乗の小姓数人を従えて、六頭立ての馬車四台が私の庭園へ入ってくるのを見ました。シヨール殿、ロアン殿、ラヴァルダン殿、コエトロゴン殿、ロクマリア殿、ゲーの男爵、レンヌやサン・マロの司教、アルグージュの殿方、そして八人から十人ほどの存じあげない方々でした。アルイの殿方についても失念しましたが、名を確かめるまでもないでしょう。こうした一行をすべて受け入れました。みなでいろいろなことを話したり、応えたりします。ついでとても気持のよい逍遙のあと、散歩道の樹蔭で大変に洒落れて美味しい軽食、なかでもフォルジュの霊水と評されるブルゴーニュ酒を供しました。これこそ魔法の杖で造られた、と皆様は信じ込まれたようです。ヴィトレに来るよう、シヨール殿は私に切望されました。そんなわけで月曜日の夕方にこちらに来ました。シヨール夫人のお心遣いで晩餐会が設けられ、『タルチュフ』が上手に演じられました。ついで舞踏会が始まり、パス・ピエとメニエットが私をほろりとさせました。〔中略〕昨日はわがセヴィニエ塔へ全ブルターニユをお迎えし、ここでも演劇を楽しみました。『アンドロマック』も田舎の劇団にしてはかなり上手です。宵に晩餐を供し、ついで舞踏会に移りました。〔中略〕

〔王権からブルターニユ三部会に課せられた〕献納金を一週間もまえに済せました。三〇〇万リーブルを要求されたのですが、抗弁せずに二五〇万リーブル納入し、決着をつけたのです。ほかに総督殿が五万エキユ、ラヴァルダン殿が八万フラン、他のお歴々も分相応に負担されます。これらすべてで二年分にあたります。こんな仕方では地方三部会への奉金を際限なく要求するところを見ると、私たちがブルターニユ人の体内には橋下の

河流のようにたえず葡萄酒が横溢する、と思つてゐるのでしようね。⁽⁵⁾

一六六七年ヴェルサイユの造管が開始され、一六七二年に勃発したオランダ戦争も重なつて、王権には膨大な租税収入が必要であつた。財政を司るコルベールはとくに間接税を強化し、一六七四年の政令でタバコを国家専売に限定する。また、婚姻届等に限りられた印紙税が、生産物取引のあらゆる書類にまで拡張され、ブルターニュでは地方三部会の承認なしに実施された。⁽⁶⁾しかし、生産と商業への抑圧に抗する民衆二千人が、一六七五年四月一八日首都レンヌの印紙局を襲撃し、果敢な反税闘争の口火を切つた。ただちにこの暴動はナント、ヴァンヌ、デナンなどの諸都市、さらには半島西端のドアルヌエーズ湾沿岸へと点火し、辺境の鬱積した憤懣ともあいまって七月末にはブルターニュの南部全域へ拡大する。こうして〈印紙税反対闘争〉は都市コンカルノーやボン・ラベの掌握へと進み、コルベールの政權を揺がす最大の農民一揆となつた。いまなおブルターニュ独立の悲願を秘めるシャルドネは、近書『ブリュターニュ史』で三百年前の蜂起をつぎのように叙述する。⁽⁷⁾

コルヌエーユの辺境、クレダン・ポエルでは公証人ル・バルプが農民一揆の先頭に立ち、勢いは急速に西部および南部に拡がつた。『農民綱領』と題する宣言がそうした闘争の目的を明確に示し、〈痛撃〉を意味する仮名のもとに彼らの課題を四つの項目に要約している。それらは苦情や不満を表明するだけでなく、農民を悲惨にする根源、すなわち封建制度の隷属・弊害、王国からの苛酷な要求、高圧的な命令と破滅的な負担、〈ブルターニュの自由〉に反するあらゆる事柄を攻撃する。物納年貢、賦役、かまど税、水車使用料、狩猟許可料、塩税、タバコ税、印紙税、等々。また、愛し合つておれば、爵位をもつ領主の娘と結婚できることを、農民は望んだ。

〔中略〕

極端な行動がときには反感を招いたとしても、農民一揆の急速な発展はこれら悲惨の根源が現実に根強く存

在することを実証した。コンカルノーとボン・ラベは反乱側に占領される。西部に逃れたシヨール公爵はポール・ルイで封鎖され、救助を求めた。都市モルレーも危くなる。そして、自分たちの行動に支援を仰ぐため、ル・バルブはオランダ人と提携する交渉を始めていた。⁽⁸⁾

西部に潜伏した総督シヨールは、カンペルレ等の駐屯軍に救助を求めたが、反乱の鎮圧にはなお慎重であった。一六七五年七月三日ルイ十四世はコルベール宛親書において〈海の國〉の自治要求に強い危惧を表明する。国王の意を受けてヴェルサイユは陸軍六千人の派遣を決定し、長期戦の装備まで用意した。こうしてブルターニュ掃滅を合言葉に国王軍は主要都市ナントへ進撃し、ファルツ侵攻に匹敵する虐殺と略奪を開始した。指導者ル・バルブは逮捕のうえ刺殺され、連座した数百人がマルセイユの奴隸船へと護送される。レンヌ市民には十万エキユの制裁金が科され、一揆に参加した村々では教会の鐘まで破壊された。⁽⁹⁾コルベール一家と親密な関係を有し、シヨール総督夫人の親友であるマリ・ド・セヴィニエは、激動の年も九月末から領地ラ・ロツシエに滞在し、ブルターニュの惨劇について同時代人としての証言を遺す。

〔セヴィニエ夫人の一六七五年十月三十日付グリニャン夫人宛書翰〕

レンヌに関する新しい情報をお望みですか。ここには五千人の兵士が常駐し、なおもナントから送られてきます。市民に十万エキユの課税がなされました。そして、二四時間以内に支払わないと、兵士が二倍の決済を求めます。彼らは大通りの遮断と封鎖を行い、生活の資を得る営みも禁じました。だから、貧民、老人、妊婦、子どもなどすべてが、行く先も食べるものも寝る場所もなく、涙に暮れながら町はずれで流浪するのです。ヴァイオリンを弾く男に一昨日車責めの刑が執行されました。彼の演奏は踊りの曲で始まり、印紙税による略奪を表現したのです。死刑のあと彼は四つ裂きにされ、あたかもエクスの〔主人殺し〕ジョスランのよう

にその四肢が四つの町角に晒されました。暴動を挑発するよう、印紙税請負人が二五エキュ呉れた、と彼は息を引きとりながら呟きました。けれども、それ以上はなにも判りません。六十人の市民が逮捕されました。当地こそほかの地方に対する絶好の見せしめなのです。総督と総督夫人をとりわけ尊敬させるために、また彼らに侮辱的な言葉を浴びたり、彼らの庭園に石を投げ込ませないために¹⁰⁾。

(一)

一九世紀末葉に〈海の國〉の地方史家デュピュイは、アンシアン・レジームにおける公衆衛生と防疫活動について調査した。ナント、レンヌ、ランデルノなどで彼が涉獵したのは、主として一七一八年から大革命直前までの古文書である。そうした探究の成果「十八世紀ブルターニュにおける伝染病」は地元の定期刊行物『ブルターニュ論叢』に連載され、いまなお史料の豊かさと論述の緻密さによつて傑出する。デュピュイの考証によれば、これら各地の公衆衛生は極度に劣悪であり、伝染病蔓延の根源はなによりも絶対王政の搾取と無策にあつた。¹¹⁾

村道はまったく整備されず、路傍には澱んだ汚水、腐った沼、湿地が点々と続いた。一七四五年代訴人総代レヌヴァンは、共同体につきのとおり訴えた。「この町のセガラン街からフォルゴエ教会に至る道路は徒歩でも馬でもどんな車でも、通れなくなつた。荒廢した道路に石塊が散らばり、窪みや亀裂も相当に見られる。真夏にはやつとの思いでフォルゴエに辿りついたが、今度の冬には通行できないであろう。ボン・ミランと呼ばれている橋、この町からランデエルノへの道にある唯一の橋も最悪の状態にある。渡る際に落ちて死ぬのではないか、と多くの人が怖れている。」〔中略〕

村道だけでなく、都市や町々を横切る道路、さらには幹線道路すらやはり整備されていない。「市内でも近

郊でも水溜りが放置され、」と一七六七年に総代監フレッセルは誌す。「岩石は掘り抜かれ、材木や堆肥が散乱している。また、いろいろな邪魔物で河流が沈滞し、いわゆる幹線道路の堀端には十二フィートも土が積み上げられている。これらをどれほど法令で禁止しようと、なんの効果もみられない。都市や近郊の住民、さらにはブルターニュ各地の道路沿い住民によって、こうした法令が蹂躪されている事実を毎日目撃する。湿つて不潔な堆肥が都市のほとんど全域で道路に積み重ねられる。また、しばしば材木が公道を塞ぎ、辛うじて一台の車しか通れない。幹線道路を縁取り、円滑な流水を促す堀が、住民の塵芥で詰つてしまふ。」⁽¹²⁾

狭隘で不潔な道路が伝染病の温床であるとともに、住民は公共の施設においてもっとも多く罹病する。なかでも教会の建物はいつも陰湿で不健康であり、悪疫流行の際には貧者・病人の避難場ともなった。また、町の中心に位置する墓地では多くの遺体が放置され、そこで発生した虫類が公共の井戸にまで這い出す。⁽¹³⁾公共の道路や施設の整備だけでなく、飲料水の保全や塵埃・汚物の処理についても行政当局の責任は大きい。青物市場の賑うランデルノやブルターニュ最大の都市ナントについてデュピュイは左記のように史料を列挙する。

「悪疫の頻発が過去も現在もわが町を苦しめ、」と一七二一年に「ランデルノ」市長は指摘した。「その猛威は王国全体をも悩ませている。こうした疫病は町々に充満する塵芥によって惹き起される。とくにランデルノ市はそうであつて、ここでは大半の家が便所を持たない。各人が窓から排泄物を棄て、悪臭を町中に拡げるので、怖ろしい病気が長びいたり、発生さえする。この忌まわしい不都合を是正するには、一台の運搬車を導入して、病院管理部に委ね、朝夕一度ずつ町からすべての汚物を取り除くほかない。」〔中略〕

都市が非衛生的である原因には、飲料水の不足や劣悪も含まれる。大抵の町村には水源の調査と貯水の保持を担当する給水係が置かれている。また、多くの行政当局が地下水道の建設に多大の経費と計上した。しかし、

汚物や糞尿から井戸と水源を護ることはどこでもきわめて難しい。「昨日の午後メヤール港を視察したが、」と一七二〇年ナントの参審人は報告する。「各人が汚物を少しづつ川に捨てるのを目撃した。水の沈澱を放っておけば、飲料水の汚染と腐敗を招くことは必然である。というのは、水売りは港の川口で汲んだものを、町中に売り捌く。」ナントではすべての井戸に囲いと錠前を付け、夜間は閉鎖し、近隣の小売商に錠を預けた。⁽¹⁴⁾

また、サン・マロに近い都市ドルでは高層の家屋が密集し、道路より下方に多くの住居が築かれている。そうした部屋の窓辺はアーケードやカテドラルにも遮られ、換気と陽当りがきわめて悪い。⁽¹⁵⁾とはいえ、ブルターニュの貧窮は市街よりも田園において格段に深く、〈印紙税反対闘争〉を激化させる要因ともなった。農民の窮迫を端的に示すものは極度に劣悪な住居と家具であり、伝染病蔓延や平均寿命の短さも、まずそこに根源が認められる。レンヌで見出した古文書を手掛かりにデュビュイはつぎのとおり論を進める。

伝染病を募らせる農村固有の原因は、湿気が多い住居に農民が暮すことである。「普通そうした住居は領内でも最悪の泥地に置かれ、堆肥に囲まれている。門や窓はよく閉まらず、昼も夜も腐った空気が入り込む。」〔中略〕この地方では藁ぶきの家に大抵ひとつ部屋しかなく、低い薄手の板壁でふたつの部分に仕切られる。そうした片側に家畜を入れ、他の片側に農夫と家族が居住した。ブルターニュ南部には現在でもその種の原始的な家屋が若干見出される。やや裕福な農園では小作人の住居が家畜小屋とは別にされる。しかし、この場合でもサン・ブリユックの証言によれば、ひとつの部屋で何人も住むよう、ほとんどの家屋が建築されていた。

ブルターニュの農民にはベッドも足りなかった。吐気を催すほどベッドが不潔であることを、医家や聖職者や貴族が慨嘆する。ジョスランの医家ロバン・ド・ケリアヴァルの見解では、一七七一年ブレメ教会区を破滅させた怖るべき赤痢も、大半は住居の不潔に起因した。「身体が貧窮や病気で弱ると、住いの不潔が赤痢の発

生と感染を惹き起す。たえず転げ回る子供は粘液状の排泄物を家中に垂れ流す。こうした排泄物が悪臭を發散し、それだけで疫病蔓延の原因となる。私の敬愛する外科医ラガリットは、プレメ市に定住し、さまざまな家を訪れているが、覆いのない場所で父母が子どもに用便をさせ、清掃もしないのをいつも見た。病気が子どもから發生するとしても、父母の不潔にその原因は帰せられる。」

不潔は疥癬をも生み出す。「プルトーニユに蔓延するこの病氣は、」と一七八七年に博学な医家アルドルイエルは述べる。「昔からの風土病でもあるが、大抵は軽く見られたり、下手な処置を受けたりする。また、しばしば誤った局所用薬がなされ、沢山の人々を耐えがたい状態にする。疥癬によつて彼らは人生の大半を無氣力に過ごし、体内ですでに感染し、虚弱となった子どもが数多く出生する。」家屋の不潔と不衛生は結核、とくに瘰癧を増加させ、病院の記録に示されるとおり、疥癬と同じ程度蔓延した。⁽¹⁶⁾

なお、最近の研究方法を駆使したドリユモ編『プリュターニユの歴史』は、教会の記録等によつて十八世紀の人工動態をつぎのように把握している。一六九六年に総代監ベシャメーユは人頭税の名簿作成のため調査を行い、プルトーニユの人口を百七十万人と計算した。この種の算定は戸別税を徴収する際にもなされ、大革命直前の一七八四年財政家ネッケルは同地の住民を二百二十万人と報告する。しかし、一七二〇年から一七四〇年まで人口動態がたえず上昇したのを別として、十八世紀のプルトーニユでは死亡率がしばしば出生率を凌駕した。すなわち、(凄惨な一七〇九年)をはじめ、一七二二年、一七二〇年、一七四〇年、一七四二年、一七六六年、一七七六年などがそれである。⁽¹⁷⁾ こうした事態の源流は十六世紀以降の搾取と抑圧に勿論存するが、(海の国)を屍の淵と化す悪疫に絶対王政も真剣な対処を迫られた。同書の記述を引用する。

栄養不足と伝染病がこのような危機の原因である。十八世紀の記録ではこれらふたつの問題において重要な

進歩がたしかに認められる。それは無数の微細な改善、あまり気づかれず、規模も小さな改善から成りたつ。しかし、そうした改善もいつかは積み重なる。プルターニユ総代監は伝染病への闘いに多大の尽力をした。たとえば一七二一年にコペンハーゲンで、一七二〇年にマルセーユで、また一七二八年にギリシアのザキントスでなされたように、隔離という伝統的な措置が伝染病には久しく取られてきたが、復受任吏ヴエデイエとレンヌの医家デュボアによって一七三〇年頃から疫病への直接的な対策が講じられる。一七三一年より財務総監はいわゆるエルヴェシウス薬箱の若干を定期的に送付させた。十八世紀中葉には伝染病の発生地を復受任吏が報告し、総代監区の経費で派遣された内科医と外科医が防疫に努める。プレストにおける一七五七年から一七五八年にかけての疫病猖獗も十八世紀後半への実験台として役立った。⁽¹⁸⁾

第二節 プルターニユの悪疫と〈エルヴェシウス薬箱〉

(一)

〈凄惨な一七〇九年〉にパリ施療院で献身的な治療を行ったジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウスは、一七一三年ルイ十四世直屬の医師団へ登用され、以後一七五五年に歿するまでヴェルサイユ宮に出仕した。しかし、この篤実な人物はなによりも民衆の医者としてパリ市中での診療を続け、財務総監の委託による医薬発送にも協力した。伝染病の特効薬を地方の罹災地を送付することは、経験医ジャン・アドリアン・エルヴェシウスによって一七〇六年頃から開始され、フランスにおける有力な防疫活動となっていた。発送される大箱は〈エルヴェシウス薬函〉と

して世に知られ、家伝のイペカ吐劑など約十種の特効薬がそこに梱包されていた。⁽¹⁹⁾一七二七年に経験医ジャン・アドリアンが逝去すると、まもなく子息ジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウスは各地の総代監に管掌の引き継ぎと業務の継続を通告する。

〔宮廷医エルヴェシウスの一七二七年五月二日付回状〕

拝啓。数年来国王陛下のご配慮によって〈薬箱〉が用意され、貴管轄地域の病める貧者に本年も配分できる、との配送通知書を財務総監から受理されたであろう。配送の協力者であった余は、父の死後ひとりでのその任務を担当しており、現在の業務内容について報告したい。指令された品目と数量の医薬だけを梱包し、年毎に必要な使用書にも変更はない。梱包された医薬の品目、数量、処方は、印刷・添付した一覽に明記されている。貴下から復受任吏へ、さらには復受任吏から黒衣修道女会や慈善協会へ配分される際には、医薬の送付先と必要な注意を付記されたい。〔中略〕

医薬の慈善的な支給が有益であり、病める貧者に対して最大の贈物となることを、枢機卿ならびに財務総監はよく認識されている。配分した医薬の効果だけでなく、蔓延している病気について克明な報告書を貴下が作成されること、また貴下の要請に応じて進言する任務を余が担うことを、こうした方々は望んでおられる。日々余はこれらの閣僚と顔を合わせており、貴下より送付される詳細で厳密な報告書を提出できる。〔中略〕

ヴェルサイユ、一七二七年五月二日

〔ジャン・クロード・アドリアン・〕エルヴェシウス（署名）⁽²⁰⁾

アンシアン・レジームにおいては国王諸税の徴収と同じく、こうした医薬の配送も財務総監の総轄のもとに置かれた。三十名に及ぶ総代監は財務総監の推挙によって国王から任命され、フランス各地で地方行政の枢要を占める。裁

判と財務の管掌を第一として総代監の権能は多岐に渡り、軍事・宗教への監督、公安秩序の維持、食料物資の確保、公共土木事業をも含む。また、総代監は補佐として復命任吏を自由に任免し、彼らに命令の執行や情報の提供を求めた。⁽²¹⁾

ブルターニュへの医薬配達は次第に定期化し、財務総監または財務省係官から毎年総代監に告知された。『名門エルヴェシウス家——国王用命の治療』の著者ラフォンも、二十世紀初頭にこうした医療政策の記録を鋭意収集した。⁽²²⁾以下は（エルヴェシウス薬函）をめぐって財務総監とレンヌ総代監の間で交わされた公文書の一部である。

〔財務総監オリーによるレンヌ総代監ラ・トゥール宛書状〕

ヴェルサイユ、一七三三年三月三日

毎年地方がエルヴェシウス殿の医薬から受ける恩恵に鑑みて、国王陛下は本年も支給を継続するよう英断された。したがって、昨年と同じく貴下は均等の小函十二から成る〈薬箱〉を受理され、復委任吏または徴税官区へ送付されたい。農村の病める貧者を癒すこれらの医薬が、組織されておれば黒衣修道女会によって、あるいは聖職者ないしとくに慈善的で聡明な人々によって、慎重かつ的確に配分されるよう留意されたい。〔中略〕これらすべての医薬には使用書、天秤、薬壺、フラスコを同封する。本年のうちに吉報が届けられることを祈願する。

敬具。

〔財務総監〕オリー⁽²³⁾（署名）

〔レンヌ総代監ラ・トゥールによる財務総監オリー宛書状〕

〔レンヌ〕、一七三六年四月十一日

拝啓。今次における医薬配分の状況を報告する。リレ嬢に配分した小函を除けば、ご諒承頂いた昨年度と異

ならない。(リレ嬢への小函はサン・マロ近くのロゼー黒衣修道女会に与えたもので、ここでは村の収入が数年前から著しく減少し、普通の仕方では貧者の救済をなしえない。)小函二筒半はボーおよびシャトープリアンの復任吏に送った。また、サン・マロ司教座ブルバレ教会区で数箇必要と十一月十三日付書翰で指示頂いたので、一箇はヴォブリュアン嬢氣付に、ほかの一箇は会長コルニユリエ夫人に配送した。⁽²⁴⁾

パリから発送された(エルヴェシウス葉函)は総代監のもとで小分けされ、さまざまな人々の協力と連携のもとに病める貧者まで届けられる。ほとんどの村々では医者も薬剤師も見当らず、総代監の命で出向いた担当者は農民から疑念と敵意すら浴びた。このような状況で医薬支給を仲介したのは宗教関係の人々、村落の司祭や慈善協会の婦人であつた。なかでも黒衣修道女会と白衣修道女会が貧者のために献身的な奉仕を続け、独自の薬局や病院をも設置した。つぎに掲げるのはそうした宗教者の貴重な証言である。⁽²⁵⁾

〔ブルエル黒衣修道女会のレンヌ総代監ラ・トゥール宛書翰〕

閣下に深い敬意を捧げ、イエス・キリストの肢体、われらの親愛なる貧者に向けられたご配慮を感謝致します。エルヴェシウス殿の医薬を収めた小函をただいま受け取りました。これらの医薬が発揮する素晴らしい効果を私たちは表現できません。ただ毎日それを実感しております。私たちは貧しい農村に住み、ほかの援助を得られません。この小函が届かなければ、なにも持たないのです。というのは、二年間なにも受け取っていません。こうした事実をご存じでしょうか。

ブルエル、一七三一年五月十日⁽²⁶⁾

伝染病の蔓延に際しては総代監も能うかぎり一般医および外科医を罹災地へ派遣した。日当としては一般医に十二リール、外科医に四リールが公費で支払われ、赤貧の患者へは無償で診療と医薬が施された。個々の患者につい

てこれらの医家は病状と処方を見代監に報告し、必要に応じてパリ在住のエルヴェシウスに臨床的な助言を仰いだ。⁽²⁷⁾
 総代監と復命任吏はこうした防疫活動を厳しく監督し、(「エルヴェシウス薬函」) に関してもしばしばその効果を報告させる。

〔カンペール医薬配分人の治療報告〕

我らはカンペールの貧者のため総代監殿から復命任吏に送られた医薬を配分し、以下の事実を証言する。高熱あるいは嘔吐を伴う病気に關して、下剤類が効果的であった。

イドロゴール下剤は腫瘍を併発した病気によく効く。一服のそれでただちに治癒することが検証できた。適量のイペカ吐剤は胃部を爽やかに清めるので、下痢に罹り易いとき、あるいはそれに感染したとき、洗滌に効果的である。

イペカ吐剤を飲ませた夜、胃部を強め、安樂にするため、珊瑚鎮痛剤を与えることが必要である。

あらゆる種類の慢性・急性熱病に粉末解熱下剤が四分の一か三分の一の量で効く。〔中略〕

金水とエリキシル剤は腐敗性・衰弱性の病氣、あるいは胃部の重大な疾患に驚嘆すべき効き目を示す。これらは沢山の患者を恢復させて、効力が充分検証された。現在も投与の必要に迫られており、なお大量に送付されるよう切望する。〔中略〕

患者一同は総代監殿のご高配に深く感謝し、ますますのご壮健を祈願する。

カンペール、一七三二年一月二一日

カンペール貧民担当

ルイズ・マリ・カルデ (署名)

テル・オ・デュック貧民担当

ミッシェル・ド・スタンギエ (署名)⁽²⁸⁾

一七四一年五六歳のジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウスは、ルイ十五世の王妃マリー・レクザンスカ
の首席侍医として王室医師団の要めを占めていた。その翌年無名の青年ジャン・ジャック・ルソーが新案の音楽記譜
法を携えてパリに到着し、まもなくデイドロ、ダランベール、デュパン夫人などと親交を結ぶ。⁽²⁹⁾一七二二年モンテス
キュー著『ペルシア人の手紙』の刊行によって暁を告げたフランスの啓蒙運動は、『百科全書』の刊行に至るもつと
も高揚する時期を迎えつつあった。

（一七〇九年の凄惨）を想起させる災害は、一七四〇年の酷寒から始まった。冷害によって穀物の収穫が極度に悪く、
九月よりは飢饉に晒される。同年春から結核等の伝染病が発生し、以後二年間フランスの全域で猛威を振るつた。⁽³⁰⁾こ
の期間における飢饉と疫病の犠牲者は年毎に約六十万と推定され、一七四〇年より一七六〇年までの死亡数は総計二
二三万人に達する。ブルターニュの悪疫は一七四一年夏から蔓延し、なかでも赤痢と熱病が未曾有の被害を惹き起し
た。この史実に関するデュピュイの論述はとくに詳細であり、真に迫っている。

一七四一年の伝染病は七月にヴィトレの近郊で始まった。それこそ凄絶な赤痢であつて、急速に勢いを強め、
ブルターニュの全域に拡がった。十月に猛威が頂点に達したと思われる。同月の初旬には復命任吏の急報がす
べて悲劇的なものであつた。フゲールの復命任吏によれば、二カ月間に管轄下の都市で二百人、農村で三〇〇
〇人が、「みな若くして」埋葬された。「この県を構成する二七の教会区のうち」とエデからも復命任吏が伝
える。「多少とも赤痢に襲われぬところはまったくない。七月の末には疫病はまずコンプール、ラ・シャペル・
ショセ、タンテニアックで発見され、これらの地域がもつとも悲惨な状態となつた。死者の数は老若合わせて

二千五百に達し、その多くは十五歳以下である。〔中略〕

災害はヴァンヌ、ルドン、ヴィトレの近郊でとくに拡大した。「リメゼルとその近郊で蔓延する病気は、」とポンクロワの復命任吏は誌す。「最初背中に悪寒を覚え、熱と震えを伴う。患者は立ち上り、身を起こし、熱っばいだけだと言う。第三日に憔悴して伏し、ほとんど話さない。第七日か第八日に譫言が始まり、衰弱と難聴を伴って視紅に陥る。そして、第十日か第十一日に舌が腫れ上がり、第十五日までもち堪える患者は少ない。これこそ真の悪性熱病であり、当初は軽い発熱という見せかけで現われる。」一七四二年五月にはヴィトレの復命任吏が総代監につきのとおり書く。「ヴィトレでは患者と死者が次々と殖える。新たに感染した人々が毎日報告されるものの、もはや医薬が用をなさない。脇腹の激痛を伴う会陰炎症、突然の錯乱を惹き起す悪性熱病など、聞いたこともない病気である。〔中略〕私たちのところにはふたりの医家、ジャンヌ・ド・ラ・マトレおよびダアルヌアン・ド・ラ・ヴィラルテしかいない。前者は長年の経験を有し、力量も認められているが、自分の患者と同じ病に冒され、いまや危篤の状態にある。万事においてマトレより格段に劣る後者は、不確か⁽³¹⁾で自信のない治療しかできないので、信用も繋げず、何事もなしえない。」

レンヌ総代監が管轄する七つの教会区では、一七四二年一月疫病による死亡者が八八九に達した。各地の総代監によれば、シャトーブリアンでは一六九九名、シヨロランでは二二二八名、アントランでは一九四〇名が同じように歿した。ひととき下火となった伝染病は、新たな熱病を加えつつ勢いを取り戻し、一七四二年七月にようやく終息した。ブルターニュの悪疫で奪われた生命は一年間で推定八千を超え、その大半が一四歳以下の子どもである⁽³²⁾。こうした災厄における行政当局の対応や窮迫した農民の反応へとデュピュイの考究は進む。

ブルターニュを焼き尽す怖るべき災害に直面して総督も、残忍に薙ぎ倒される人々を救助するため、最大の

努力を尽した。総督の第一の手配は、貴族や都市の団体を緊急の方策として招集し、赤貧の患者を悲惨の淵から救うことであつた。領地にいる貴族は到る所で奉仕や慈善を見せたがる。しかし、もつとも富裕な貴族は宮廷や大都會で暮し、あてにはならなかつた。〔中略〕財務総監は伝染病の特質や治療の方法について高名なエルヴェシウスに診断を求めた。そして、農村の外科医に与える〔治療心得〕、ならびに貧者に無償で支給する医薬を総代監宛に送付した。ただし、田舎ではエルヴェシウスの薬も〔治療心得〕ほど成功を収めなかつた。

「農民たちは」とカンパールの復命任事は述べている。「樹皮、団栗、明礬、獣脂など単純な医薬しか知らないので、瀉血を施さうとすると、まるで絞殺されるかのように恐がつた。」³³

伝染病の発生に際しては主要な症状や進行の状況がバりに急報され、病因・医薬・処方について宮廷医エルヴェシウスの診断が求められた。たとえば、一七四一年に蔓延した赤痢には性質を異にする数種が認められ、彼の診断書は四次にわたり作成される。これらの診断書は多量に印刷され、ブルターニュ各地の教会区まで急送された。なお、エルヴェシウスに届けられた多くの治療報告によれば、同年の悪疫に対してはイペカ吐剤よりもむしろ珊瑚粉剤が効奏した。罹災地で苦闘する個々の医師からも彼は相談を受け、彼らに一層綿密な指示を与えた。同年秋レンヌの医家ルサンの質問に応えた書状につきに掲げる。³⁴

〔宮廷医エルヴェシウスの一七四一年十月二十六日レンヌ総代監宛書状〕

腸部の分泌腺が鬱血・肥大化すること、そうした鬱血が隣接のあらゆる脈管で血液の循環を害すること、またそうした肥大化が各部の炎症や潰瘍を惹起することに、赤痢の原因はつねに存する。したがって、この病気を治すもつとも確実な方法は、悪い体液を溶かし、分泌腺を清めるところにある。これこそイペカ吐剤の主たる効果と言へる。〔中略〕

値段を考えてみると、適切な方策がなければ、イベカ吐剤を勧めることは難しい。しばしばこの医薬はあまりに高価であり、赤痢の頻発によって急速に高騰しつつある。赤痢に感染した貧者を診察するすべての医家に對して、総代監閣下が以下のように指示されるよう、結びとしてお願いしたい。すなわち、最初にまず瀉血を施し、ついで軽い浣腸を行うこと、そして珊瑚粉剤の投与と夜間における麻酔薬を試み、ついには前述のとおりイベカ吐剤に頼ることを。

ヴェルサイユ、一七四一年十月二十六日

〔ジャン・クロード・アドリアン〕エルヴェシウス（署名）⁽³⁵⁾

〔宮廷医エルヴェシウスの一七四一年月付レンヌ総代監宛書状〕

ルサン殿が提案されたすべての療法は非常に優れたものであるが、農民の間では実施できない。あまりに複雑な療法だからである。単純な煎じ薬または沸騰させた良質の真水のほうが、複合して飲みにくい煎じ薬よりも適切で効果的と思われる。糠の煎汁、亜麻似の種、鶏卵の黄身などを用いた浣腸が、いかなる療法よりも容易であり、優れている。なお、この際蠟燭の獣脂を用いてもよい。

医師各位に確言させて頂きたい。余の第二次診断に明示された療法をこれら三種の赤痢に適用されれば、際立った成功が得られるであろう、と。ただし、第四種の赤痢に患者が苦しむ場合には、やや思い切った瀉血を施されるように⁽³⁶⁾。

辺境で献身的に働くこうした医家の記録は、〈エルヴェシウス薬箱〉の多大な効果を伝えるとともに、〈海の国〉における防疫活動の困難をも語っている。度重なる伝染病の蔓延が医学の遅れや医療の乏しさによるばかりでなく、住民の隷従と貧困と蒙昧に起因し、究極的には封建制度と絶対王政の結果なのである。たとえば、カンパールの医者ベ

ルネは半島最西端の僻地で診療を続けながら、一七四一年末巡察に訪れた総代監に以下のとおり訴えた。⁽³⁷⁾

〔医家ベルネの一七四一年十二月付ヴァイアルム総代監宛書状〕

視紅を伴う熱病が流行しているとは感じられません。しかし、身体を衰弱させる激しい熱病が拡がり、誤った食事療法と救護活動の欠如によってもっとも頑健な人々すら、致命的な状態にあるのです。〔中略〕

エルヴェシウス殿から医薬を教えて頂いても、指示どおり投与できなければ、徒労に終わります。たとえば、イペカ吐剤を与える前に瀉血を施すよう促されましたが、瀉血は農民に恐怖を与え、五月から相当の期間を経たいまま実施できません。〔中略〕

幸いにも私なりに赤痢の療法を試み、カンペールで死亡率が最高なることを防ぎました。すなわち、患者の体力が耐えられる範囲で、血液をできるだけ拡散させればよいのです。そのあとで大黄とディアコルデアムに少量のイペカ吐剤を混ぜて与え、さらに一杯のテリアカと阿片半粒を夜に服用させると、数日のうちに赤痢のあらゆる症状が消え去ったのです。⁽³⁸⁾

〔註〕

本稿における主要な文献に関しては、下記の略号を使用する。

Chb : Joseph CHARDONNET, *Histoire de Bretagne*, Paris, Nouvelles Editions Latines, 1985.

De : A. DUPUY, *Les Epidémies en Bretagne au XVIIIe siècle*, dans *Annales de Bretagne*, Tome I (1886), Tome II (1886-1887).

Dhb : Jean DELUMEAU, *Histoire de la Bretagne*, Paris, Privat, 1969.

Ld : Louis LAFOND, *La Dynastie des Helvétius, les remèdes du roi*, Paris, Occitania, 1926.

Sc : Marie de Rabutin-Chantal SEVIGNÉ, *Correspondance*, éd. par R. Duchêne, Paris, Gallimard, 1972-1978, 3 volumes.

- (1) *Ld.* p. 148.
- (2) *Chb.* pp. 101-105, 117-120.
- (3) Jeanne A. OJALA and William T. OJALA, *Madame de Sevigné, A Seventeenth-Century Life*, New York, Berg, 1990, pp. 111-113.
- 因みに本稿(その二)で述べたとおり、この数年後ショヌ夫人は経験医エルヴェシウスを主治医に選り、セヴィニエ夫人もキナ樹皮の開発者タルボアを絶賛する。
- (4) *Sc.* Tome I, p. 301.
- (5) *Sc.* Tome I, pp. 319-320.
- (参考)井上究一郎訳『セヴィニエ夫人手紙抄』岩波書店、一九四三年。一七七—一八八頁。
- なお、ガリマール社刊『セヴィニエ夫人書翰集』の編者デュシェーヌはここで言及された献納金についてつぎのとおり註記する。一六七一年八月五日国王親任官ブシユラは、二年前に結ばれた約定を蹂躪し、ブルターニュ三部会に献納金三〇〇万リールを命じた。こうした法外な要求が一六七五年に勃発する印紙税反対闘争の遠因となるが、つとにセヴィニエ夫人はその重大さと危険性を予感している、と。
- Sc.* Tome I, p. 1145.
- (6) J.-J. CLAMAGERAN, *Histoire de l'impôt en France*, Paris, 1876, Tome III, pp. 643, 654, 686.
- なお、右のカラマジユラン著『フランス租税史』によれば、歳出膨張の主要な要因は、①軍事費(五千万リール)、②国債の償還(千五百万リール)、③国王一家の宮殿建設(九百万リール)、④王権の秘密経費(七百万リール)等であり、とくにオランダ戦争が一六七二年から軍事費を激増させている。(括弧内の金額は一六六二年より一六八三年までの年平均)。*ibid.*, Tome III, pp. 670-676.)
- (7) *Chb.* p. 120. *Dhb.* pp. 291-292.
- (8) *Chb.* *op. cit.*, pp. 121-122.
- (9) Ines MURAT, *Colbert*, Paris, Fayard, 1980, p. 334.
- CLAMAGERAN, *op. cit.*, Tome III, pp. 686-687. *Chb.* pp. 121-122.
- (10) *Sc.* Tome II, pp. 146-147.

なお、従来出版されたセヴィニエ夫人の伝記や同夫人書翰集の抜粋本では、こうした政治批判の側面がおおむね等閑にされている。セヴィニエ夫人の政治的・社会関心については、むしろ左記の通史的な女性史が多くを教える。

Alain DECAUX, *Histoire des Françaises*, Paris, Academie Perran, 1978, Tome II, pp. 159-171. (アラン・ドゥコー著、柳谷 敏訳『フランス女性の歴史』大修館書店 一九八〇年。第二巻 一七一-三二頁。)

- (11) *De*, Tome I, No.2, pp. 115-116.
- (12) *De*, Tome I, No.2, pp. 116, 119.
- (13) *De*, Tome I, No.2, pp. 119-120, 124-125, 136.
- (14) *De*, Tome I, No.2, pp. 129, 134.
- (15) *De*, Tome I, No.2, pp. 131-132.
- (16) *De*, Tome I, No.2, pp. 136-138.
- (17) *Dhb*, pp. 331-336.
- (18) *Dhb*, p. 336.
- (19) *Ld*, pp. 145-146, 153.

Jean DELUMEAU et Yves LEQUIN, *Les Malheurs des temps, histoire des fléaux et des calamités en France*, Paris, Larousse, 1987, pp. 356-359.

右の大著『時代の悲惨、フランスにおける災厄と災害の歴史』など、若干の医学史や疫病史では医家エルヴェシウスの医薬発送が高く評価されている。しかし、カーン著『エルヴェシウス—その生涯と著作』等の評伝は、哲学者の父祖について相当の論述を含むものの、(エルヴェシウス薬函)やプルトーニウスの防疫活動にはまったく触れていない。

なお、『告白』第一部第八巻によると、一七五〇年頃ルソーは持病の尿閉症について宮廷医エルヴェシウスの診察を受けた。「そのような発作に襲われたあと、私は以前ほど元気でなくなった。頼りにした医家たちが、かえって病気をこじらせたようである。モラン、ダラン、エルヴェシウス、マルアン、テエリなどに次々と診察を仰いだ。みな大変学識があり、私の知己でもあって、各々の仕方では治療してくれたが、すこしも楽にならず、ひどく衰弱した。彼らの指示に従えば、ますます黄色ばみ、瘦せほせ、衰えていく。容態を探るため彼らはさまざまな薬剤を試み、かえって私の想像力を怯えさせた。尿閉や尿砂や結石の苦しみが続くもので、私は信じ込む。煎じ薬、温浴、瀉血などはかの人々に卓効あるすべてが、私の病患を悪化させるだけであった。』

- Jean-Jacques ROUSSEAU, *Les Confessions*, dans ROUSSEAU, *Oeuvres complètes*, éd. par Gagnevin et Raymond, Paris, Gallimard, 1959, Tome I, p. 635.
- (20) 〔参考〕ルソー著、桑原武夫訳『告白』岩波書店、一九六五年。中、一四〇頁。
Lettre de Jean-Claude-Adrien Helvétius concernant la distribution de ses remèdes, le 2 mai 1727, Archives de la Marne, C.360, dans *Ld.*, pp. 154-155.
- (21) オリビエーマルタン著、埴浩訳『フランス法制史概説』創文社、一九八六年。八五五—八五九、六八四頁。
Ld., pp. 157-160.
- (22) Archives d'III-et-Vilaine, C.1336, dans *Ld.*, pp. 158-159.
- (23) Archives d'III-et-Vilaine, C.28, dans *Ld.*, pp. 164-165.
- (24) *Ld.*, pp. 162-163. *De*, Tome II, No.2, pp. 199-200.
- (25) ミノフ著『アンシアン・レジームにおけるブルターニュの宗教者』も以下のように述べ、代表的な事例としてトレギエやガンガンプの宗教病院を挙げる。
「貧しい病人の身柄は伝統的に教会へ委ねられた。身体の医療と精神の医療が多少とも合成されたわけである。病人の恢復には終油の秘蹟が効果的であるという信仰が、つく最近まで残ってはいなかったか。」(Georges MINOIS, *Les Religieux en Bretagne sous l'ancien Régime*, Ouest France, 1989, p. 289)
- (26) Archives d'III-et-Vilaine, C.28, cité dans *Ld.*, pp. 164-165.
- (27) *De*, Tome II, No.2, pp. 224-225.
- (28) Archives d'III-et-Vilaine, C.1330, dans *Ld.*, pp. 170-171.
- (29) *Ld.*, pp. 112-113.
- (30) DELUMEAU et LEQUIN, *op. cit.*, pp.348-349.
- (31) *De*, Tome II, No.1, pp. 30-33.
- (32) *De*, Tome II, No.1, pp. 32-34.
- (33) *De*, Tome II, No.1, pp. 34.
- (34) *Ld.*, pp. 178-183.
- (35) Consultation d'Helvétius, le 26 octobre 1741, dans *Ld.*, pp. 182-183.

(36) Consultation d'Helvétius, novembre 1741. dans *Ld.*, pp. 183.

(37) *Ld.*, p. 184.

(38) Lettre de Bernetz, le 8 décembre 1741. citée dans *Ld.*, pp. 184-185.

なお、一七五五年に宮廷医エルヴェシウスが逝去したあと、フランス各地への医薬配送はまず彼の従兄弟ジャン・ド・ディーに引き継がれ、ついで王妃マリー・レクザンスカの侍医ジョゼフ・ド・ラッソンヌにより大革命直前まで継続された。この間にラッソンヌは国王ルイ十六世および王妃マリー・アントワネットの首席侍医に昇進する。財務総監に就任した百科全書派テュルゴは、一七七六年ラッソンヌの進言に基づいて王立医学協会を設立し、フランスの公衆医療と防疫活動を大幅に前進させた。

DELUMEAU et LEQUIN, *op. cit.*, pp. 259-361. *Ld.*, pp. 186-199.